

会員の広場



「オオカミ少年」の真実

瀧口 勝行（東京）

『鍊金術の終わり』の著者マーヴィン・キングによると、金融危機には二つの法則があるという。第一の法則は、「持続不可能な状態は、考えているよりもはるかに長く続くことがある」、そして第二の法則は、「持続不可能な状態が終わるときは、想像もつかないほど

早く終わる」というものだ。

それは突然の出来事のように見えた。2008年9月のリーマン破綻は、瞬く間にグローバルな金融危機に広がった。当時、欧米経済は、後に「グレート・モデレーション」と呼ばれることになる、景気拡大と物価安定が持続する繁栄の中にあつて、光り輝いているように見えていた。だが、これを機に一挙に深刻な不況とデフレ状態に陥った。

金融危機は、偶発的に起きるものではない。企業や家計部門での過大な支出、資産価格の高騰、そしてそれに伴う債務の増大など、「ダークサイドのマグマ」は、「グレート・モデレーション」のゆりかごの中で生まれ、好況持続の幻想の下で膨張し、持続不可能な状態に

まで蓄積されて、そして突然噴火する。

わが国では、「危機の爆発」が、一足先の1990年代初頭に「バブル崩壊」という形で起こった。きっかけは、膨張した株価、地価など資産価格の急落だった。当時、日本の景気は、順調に拡大しており、物価も安定した状況にあったが、低く保たれた利子率を背景に、資産価格が上昇し、それに伴い家計、企業の債務が膨張を続けていたのである。

われわれは、やがて暴発するマグマのうねりに気が付かなかつたのだろうか。経済政策を演出する賢者たちは、景気対策には熱心でも、それに伴う社会的負債の拡大には無関心であったようにみえる。危機からの脱却のためとする、巨大な金融財政政策は、今度は、

公的部門に膨大な負債を蓄積させた。

ラインハルト・ロゴフの8世紀間に及ぶデータに基づく研究によれば、財政破綻と金融危機には、あきらかな相関がある。アベノミクス導入後、2・5倍にまで膨らんだ日銀バランスシート、名目GDPの2倍以上に膨れ上がった公的債務残高を前に、わが国は、すでに「第2の法則」の入口に立っているのは、との思いを強くする。

財政赤字容認論を主張する人達はMMT、FTPLといった新学説で身を固め、インソープ寓話「オオカミ少年」の物語を引き合いに、近づく危機の足音に背を向ける。しかし、それは、実際にオオカミが現れた物語だという事を肝に銘じた方がよい。